

平成26年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第54巻12月号(通巻665号)

風土



12

小鳥来る

神蔵

器

小鳥来るポストへ五分宙とんで

名月や神田川まで三步出ず

水打つてかはせみ盆の月を上ぐ

樹実雄逝く銀河鉄道どのあたり

月光のつもる聖書に「出エジプト記」

蛇笏忌や幽霊子育て飴なめて

藤原四代泰衡公の蓮ひらく

生きるとは真白き息を吐くことか

桂郎忌すぎて波郷忌鴟猛る

明史恋ふいま欲しきもの瓢の笛

くわりんの実一つ供へて一つ抱き

悼

ビツクムーン魂たましひ一つのぼりゆく



竹間集

同人作品



秋の蝶

宮川みね子

校庭に引く円と線秋の蝶
夜長かな言葉のつぎ穂さがしみて
ファックスの続いてとどく夜長の灯
夫の忌の星は大粒鉦叩
蠟燭を消して蠟の香秋澄めり
蔵出しの味噌いただけり蕎麦の花
露けしや廻して粘土壺となる

この街もあの人も

浜

福恵

この街もあの人も好き流れ星
男郎花の花の清しく休暇果つ
秋燕や竹撓ふほど葱干され
浦里に殉難忌あり木槿咲く
慎みて二百十日の海と空
表札に歳月の色月今宵
月上る鴨の時の潦

新涼

山田 暢子

新涼や跳び越えてみる潦
子規忌なり幾たびも空仰ぎけり
空澄むや暗証番号またちがふ
雁渡し母は病名知らされず
冷やかや輸血同意の子のサイン
夫のいのち長子のいのち秋深む
病棟を出て秋風に立ちつくす

蚯蚓鳴く

門伝 史会

草の穂や行く道はまた戻る道
下り悼小峯 穂字 鎌 蛇籠を抜ける水速し
惜しまるる芙蓉ひと日のいのちかな
文書きて文を待ちをり秋桜
新牛蒡みちのくの土つけしまま
草にまだ日の温みある子規忌かな
山頭火泊りし宿や蚯蚓鳴く

老樹以後（八）

野沢しの武

ホーム五月三時のお八つ出る楽しさ
春の連休老人ホーム個室さびし
子に蹤きての帰宅叶はず春の風邪
三日振りの髭剃り外出夏隣
銀杏若葉幹に回しし注連古び
春の連休やつと帰宅し亡妻に会ふ
咲き満ちて風にも散らぬ朝ざくら

虫すだく

鈴木 石花

風呼んで三百余坪秋桜
曼珠沙華街道看板畦に沿ひ
風通すのみに来る家虫すだく
茶掛け書く端溪硯に芋の露
青墨に綴る平仮名鱗雲
魂すでに彼岸にあらむ下り築
身に入むや右眼細動脈瘤とふ

二百十日

岩木 茂

鯖雲のそのうしろから鯨雲
稲に雨しとすと二百十日かな
とくとくの泉かそけき秋の声
ははの夢覚まさぬやうに大根時く
井戸水の味のよろしき敬老日
露にさへ躓く秋の彼岸かな
国東の霧むせび泣く団子汁

走り蕎麦

相沢有理子

冷ゆる夜の水漬く孀恋村脱ける
孀恋村去りて峠の虫しぐれ
村道の古暖簾押し走り蕎麦
石榴裂け崖の家の姥つつがなし
長き夜の子が戴る新聞切り抜きぬ
台風過ぐ介護士来りず濡れに
螺旋階児童駆けきちきちばつた飛ぶ

秋夕焼

小林輝子

月草に森の下風通ひけり
満月に兎をりしと言ひし子等は
狐火のやうな灯りや在祭
草伏すはけもの径とや夕花野
野ぶだうの七色懸かる空家かな
高みより鳶笛胡桃ひとつ落つ
嬰も荷ももう負はぬ背や秋夕焼

野菊

小野寺節子

顔よせて老女野菊と何語る
お彼岸を知らせてくれる彼岸花
追憶やはるか稲穂の千枚田
秋夕焼下校児童に赤信号
通院の行きに歸りに秋拾ふ
秋を病み己が齢を数へみる
患ひて長子の孝心身に入みぬ

醉芙蓉

田村すゝむ

灯を入れて今立ち上がる大佞武多
京の月浮かべ「誰が袖手水鉢」
秋扇吾が晩年の見え隠れ
茗荷汁時には老いの意地とほす
曼珠沙華死は我儘の終ひかも
花びらの全し朝の醉芙蓉
秋風に攔まりながら試歩延ばす

鎌倉初秋

浜 福恵

曇り日の野道を逸れて草の絮
谷山川の一右き川原やいもせどり
柳吹く風が時雨れてきたりけり
お柳灯笼濡らし城下の片時雨
辰鼓楼は待合ふ基点秋日傘
秋気澄む高楼に時刻む音
辰鼓楼の石垣を這ふ葛の花
蕎麦湯汲む白湯好みは母譲り
新蕎麦や花咲く蕎麦や但馬を後に
秋歳時記の解れ劣はる夜の更けて

山河集

同人作品



神蔵 器選

秋日和京の札所の仏たち
勉強は死ぬまでのこと秋灯す
名月や宗右衛門町の真上に
雲掃いて名月位置をさだめおり
虫鳴いてこの世に未練ありにけり

西村 雪園

水面来て黍吹く風となりにけり
湖心より届くさざ波彼岸花
古墳てふ高みにをれば山河澄む
日に一つ無花果熟れて峽の暮
日を溜めてあきつ日和の棚田かな

生田 作

秋の蝶ホース零るる水温し
滝の上に釣瓶落しの空残る
きちきちや救命胴衣垣に干す

生田 恵美子

田仕舞の紫煙狼煙のごと上がる
別べつの歩幅花野に頭の見えて

吉永すみれ

門火焚く母に告げたき事幾つ
稲架ときて村中軽くなりけり
鳥渡る太平洋を傾けて
文化の日文字の始めの楔文字
小鳥来る井上靖文学館

森屋 慶基

湧くやうに空に地面に秋の蝶
歳月や妻にうべなふ秋の服
祖父からの五代の柘榴実を弾く
自動車に胡桃割らせる鴉かな
男郎花マタギの所作に及びけり

◇特別作品◇(抄)

北海道・サハリン一周クルーズ 島 玲子

秋光や海に浮くものみな白し
星屑を拾ひて生れし秋港
見はるかす津軽海峡秋の航
初秋の道真つすぐや北大地
星月夜水先案内乗船す
アイヌ語の岬の多し秋深む
坂道を下れば港秋日濃し
朝市の味見して買ふ鱈かな
客船の千の小窓や秋灯し
出港や月のタラップ上りけり

風土集



神蔵器選

蟋蟀の音がテレビの曲に和す 秋田 本間 羊山

みちのくの稲穂ゴッホの黄より濃し

蓑虫の雲ひつばつて降りて来し

試歩の友色なき風によるめけり

虫すだく寸時の留守に灯を残す

秋麗や天守の址に石一つ 千葉 小林 共代

不許葦酒入山門木の実落つ

秋風と曲がる廻廊国分尼寺

無言館に句帖忘れし神無月

鉦叩き無言館てふ底にかな

山ひとつ動かして咲く芙蓉かな 京都 杉本葉王子

名月や南座の屋根広がりぬ

伊那谷の芒は風に赤味差す

日々草白が眩しい万歩計

身じろがぬ青鷺川に秋を呼ぶ

駅出でて一人づつなる秋の暮 津山 生田 作

水底に鯉潜みをる良夜かな

橋の上に人語ありけり星月夜

人麻呂の挽歌読む夜のちちる虫

いま朝日射す先駆けの曼珠沙華

秋の蝶湖のさざなみ押し渡る 津山 生田恵美子

独り言夫に聞かれし秋彼岸

蜻蛉の羽音反橋釘浮けり

漕ぐ櫂のはや秋光に紛れけり

向日葵のうしろ秋風立ちにけり

早晩の子等の電話や水見舞 綾部 田中富有能

七夕やひとりの家の散らし寿司

漸くにちちる鳴き初む豪雨以後

菩提寺の塀に見越しの萩白し

早稲を刈る音軽やかにコンバイン